

第二十回 齋藤茂吉短歌文学賞

河野 裕子 『母系』

青磁社

選考委員

委員長

委員

岡井 隆

小池 光

三枝 昂之

馬場 あき子

(五十音順)

河野 裕子 『母系』 (自選)

暖かな夜となりたり満月もぼんと上がれり気分のよろし

草庭を雨はしづかに濡らしをりありがたうと言ひて人は帰りき

そのこゑはわたしの鬱にかぶさり来^く死ぬまで繋がれ鳴ける昼犬

倒れ伏しそれでも咲きゐるコスモスにしづかな寒さが降^おりてゐるなり

お母さんになつてからの日々春ごとにれんげが咲いてゆつくり老いた

風はなぜその木にだけは吹いてゐる絵の奥の細いゆりの木

病むまへの身体が欲しい 雨あがりの土の匂ひしてゐた女のからだ

お母さんあなたは私のお母さんがまりて覗く薄くなりし眼を

この母に置いてゆかれるこの世にはそろりそろりと鳶尾^{いちはつ}が咲く

家の影大きくなるゆく日の暮れにこの母を置き京都に帰る

死ぬことが大きな仕事と言ひゐし母自分の死の中にひとり死にゆく

『母系』の印象

岡井 隆

『母系』という歌集名を作者は「わたしにとつて必然のものであった」と言っています。

薄い目をあけて私を見る人が今ひしひしと たった一人の母

といった歌に出てくる晩年の母。そして作者自身一人の母親として子や子の家族に向かっている率直であたたかい歌がたくさんあります。表現はあくまで柔軟であって、親しみやすく、しかもものの細部に觸れた熟達した技法があります。

冬みかんのみかんの色に励まされお食べと

言ひてわたしも食べる

むかしとは麦藁のやうな時のこと暗がりの中に

やはらかに匂ふ

などはそのほんの一、二例にすぎません。

この上ない一冊

小池 光

河野裕子氏は二十代のときから新世代の旗手として脚光を浴び、その後も現代短歌に繰り返し新しい息吹と刺激を与えてきた。次世代の歌人たちにとつて、もつとも大きな直接的先行者であったことは異論の余地がないところである。伝統と調和しつつ斬新でスケールの大きな母性の歌は、肯定的感情をゆたかに歌い上げるものとして画期的であった。この第十三歌集『母系』は母への悼歌とまた自身が病を得てからの切実な日々が主題となっていて、生と死が一層前面に出て深化し、これまでとはまた別の展開を見せる。限りなく重い主題をむしろかるやかに、スケッチ風の自在なタッチで次々に詠み、文体の構築という点でも注目に値する収穫となった。齋藤茂吉短歌文学賞としてこの上ない一冊を得、まことに嬉しい。

不可思議な魅力

三枝 昂之

河野さんは昭和四十年前後に短歌を始めた世代のトップランナーとして、短歌に新しい領域をもたらし、私たちをリードし、挑発し続けてきた。『森のやうに獣のやうに』しかり、『桜森』しかりである。今回の『母系』も大きな成果で、この歌集は短歌定型の不思議ということであらためて教えてくれる一冊として、私にはとりわけ感動が深い。

病むまへの身体が欲しい 雨あがりの土の匂ひのしてゐた女のからだ

君江さんわたしはあなたであるからに

この世に残るよあなたを消さぬよう

掲出二首は母や自分の命を通して、生きる者の水際を見つめている。その切なさが定型など無視しようとするなりふり構わぬ姿勢となり、それを短歌に引き戻そうとする定型の求心力をも生んでいる。両者のその綱引きが不可思議なエネルギーとなつて、この歌集を独自のな世界にしている。そこが得難い成果だ。

これからも私たちを長くリードし、刺激し続けてほしい。

存在のはるけさ

馬場 あき子

自分の存在について「母系」という思想が持てる人は少なくなる一方だろう。作者は七〇年代に登場して以来、恋愛のほかは出産、子育て、病、肉親の死という普遍的な題材につねに真摯に向き合いながら、独特の感性で普遍を普遍でない固有な忘れがたい情景として刻印しつづけた。

その詩質は抒情的なはるけさを伴った存在のあてどなさとともに、強い生命感に支えられた豊饒なさびしさをもっている。「母系」では殊に一身同体の感をもつてその死を見送った母への思いが、かつてないやわらかな一人語りの味わいをもった特殊な文体を拓いており、母から我、我から子へとつづく生と死の絆の中の思念が、新たな一石を投じている。

『母系』は母の病気と死、わたしの癌再発の時期に重なる。生命の本源としての母という存在はずっとわたしの大きなテーマであり続けてきたが、死までの母を目のあたりにし『母系』というタイトルはこれ以外にない揺らがぬものとなった。

これまでに出してきた歌集のなかでも思い入れの強い歌集に、斎藤茂吉の名を冠した賞を頂けるのは大変ありがたく嬉しいことである。

斎藤茂吉は近代百年のなかでも最も優れた歌人であるが、わたし自身にとっても越え得ぬ魅力を持った歌人で、四十歳になったばかりの頃、雑誌のインタビューに答えて「女の茂吉になりたい」と口走ってしまったことがある。秀歌、凡作を臆面もなく出せる鈍感ともいえる幅の広さ、渾沌とした得体の知れなさ、存在の悲しみの深みをしみ入るように詠みえる天性の歌人としての資質など、何としても茂吉に届きたいものだと思い続けてきた。

病氣のことを考えると、わたしに残された時間はそんなにないようだが、この受賞が、平明で融通無碍な大きな歌への契機になってくれれば歌人としてこの上ないことと思っている。



第20回 斎藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

河野 裕子 (かわの ゆうこ)

歌人。

1946年(昭和21年)熊本県生まれ(62歳)。

京都市在住。京都女子大学文学部国文科卒。

大学在学中に角川短歌賞を受賞。「コスモス短歌会」を経て現在

「塔」選者。毎日新聞歌壇選者。宮中歌会始選者。

歌集：「森のやうに獣のやうに」、「桜森」、「歩く」など13冊。

他に「みどりの家の窓から」、「私の会った人々」など。

受賞歴：現代歌人協会賞 現代女流短歌賞 河野愛子賞

若山牧水賞 京都府文化功労賞 紫式部文学賞

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房
- 第二回 本林勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
- 第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社
- 第四回 前登志夫 『鳥獣蟲魚』 小澤書店
- 第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不識書院
- 第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房
- 第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社
- 第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社
- 第九回 吉田 漱 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社
- 第十回 佐佐木幸綱 『吞牛』 本阿弥書店
- 第十一回 伊藤 博 『萬葉集釋注』 集英社
- 第十二回 森岡貞香 『夏至』 砂子屋書房
- 第十三回 竹山 広 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房
- 第十四回 藤岡武雄 『書簡にみる斎藤茂吉』 短歌新聞社
- 第十五回 清水房雄 『獨孤意尚吟』 不識書院
- 第十六回 小池 光 『滴滴集』 短歌研究社
- 第十七回 三枝昂之 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店
- 第十八回 花山多佳子 『木香薔薇』 砂子屋書房
- 第十九回 永田和宏 『後の日々』 角川書店

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇―八五七〇

山形市松波二丁目八一― 山形県文化環境部文化振興課内

TEL・〇三―六三〇―二九〇三